

短 報 明治期の薬剤師専門職化形成過程を探る1つの 手掛かりとしての『薬剤誌』第46号 (明治26年4月6日発行)について

昭和大学上條記念ミュージアム
小口江美子*

抄録：明治時代に新たに資格化された薬剤師の初期の専門職化形成過程を探るために、1889（明治22）年に創刊され、その「発刊の趣旨」に「医薬分業を推し進めるために」と謳われている雑誌『薬剤誌』を第1号から調査した。調査研究を進めていく中で、先行研究やWeb情報では、これまで存在しないとされていた、1893年出版の『薬剤誌』を入手した。この研究は、先行研究やその他の歴史的研究への貢献の一環として導入することを目的としている。1893年に出版された『薬剤誌』第46号の表紙、目次、奥付は、1892年に出版された第45号とほぼ同じであった。本書の本文の頁数は21頁で、それまでに発行された第1号から第45号までと比べて半分以下に減り、それにもかかわらず広告の頁は多かった。『薬剤誌』第46号の最終刊行に関する記事はないが、出版の遅れ、本文の頁数の少なさ、広告数の多さ、1892年12月の薬剤師会の参加人数の少なさ等から推測すると、東京薬剤師会の財政上の理由から継続は中止されたことが示唆された。休刊の理由は、『薬剤誌』に関する先行研究の中でも示唆されていたが、1893年に出版された『薬剤誌』第46号のこのたびの調査により、雑誌『薬剤誌』は財政上の理由から休刊になった可能性がより確実にになった。

キーワード：薬剤誌、明治時代、薬剤師専門職化形成過程、医薬分業、調剤権

緒 言

筆者は五位野研究^{1,2)}に導かれて『薬剤誌』^{3,4)}(表1)という医療雑誌メディアに現れた薬剤師の専門性と専門職化形成過程に関する歴史研究を行ってきた。この『薬剤誌』の中の社説としての「薬剤誌」と「薬剤師会記事」を第1号³⁾から順に追って調査していく過程で、1893（明治26）年発行の『薬剤誌』第46号³⁾が金沢大学附属図書館 医学図書館に存在していることを突き止めた。第46号³⁾はこれまで存在が確認されず、第45号³⁾で休刊となったとされていた。『薬剤誌』はこの第46号³⁾を最後に発行を休止した可能性が非常に高い。この後、『薬剤誌』は約8年間の休刊の後、1901（明治34）年に同じ名称の『薬剤誌』が第34号⁴⁾として再刊された。表紙の様相は大きく変わっていたが、発行元は1889（明治22）年の第1号³⁾発刊時と同じく薬剤誌社であった。

『薬剤誌』第46号³⁾が存在していたというこの発

見は、小さな発見ではあるが、近代日本薬剤師の歴史研究に、さらに五位野研究の発展にささやかな貢献ができれば幸甚と思い、研究途中ではあるが、短報として敢えて資料と若干の考察のみ紹介させて頂きたいと思う。

研究 方法

1893（明治26）年発行の雑誌『薬剤誌』第46号³⁾について、「表紙」、「奥付」の発行所と発行人兼編集人、「発行地」、「目次構成」、「薬剤師会記事」および「終刊の辞」の記載の有無、「広告」を調査した。併せてそれまでに発行された第1号³⁾から第45号³⁾までおよび8年後に再刊された第34号⁴⁾の『薬剤誌』の書誌的体裁について比較調査した。

結 果

1. 「表紙」(図1)

扉絵は第1号³⁾と同じ図柄で、ケシやジギタリス

*責任著者



図1 『薬剤誌』第46号（明治26年3月20日改め4月6日発行）表紙（金沢大学附属図書館医学図書館所蔵）

などの薬草と薬品棚，調剤器具等が描かれており，下方中央に東京薬剤師会の文字，左下に木版画の印刷所名が表示されている。発行年月日は明治26年3月20日と印刷してあるが，その上に4月6日との訂正がなされている。

2. 「奥付」の発行所と発行人兼編集人，発行地（図2）

これまでの五位野論文²⁾ すなわち「『薬剤誌』の目次リストとその記事内容，背景（2）—東京薬剤師会組織変更以降第26号（1891（明治24）年6月）から第45号（1892（明治25）年12月）—」（薬史学雑誌 第52巻第1号，2017年，30-40頁）では，第45号³⁾が最終号になっている。ここに一冊が加わったことが研究進展に役立つかは判明しないが，いつでも閲覧することができるという面では，その利便性に供することができるのではないかと考えている。

発行所は東京薬剤師会事務所，発行人兼編集人は加藤金吾，印刷人は松澤珪三，発行地は東京都京橋区出雲町十六番地となっている。この加藤という人物がいかなる人物かは不明である。

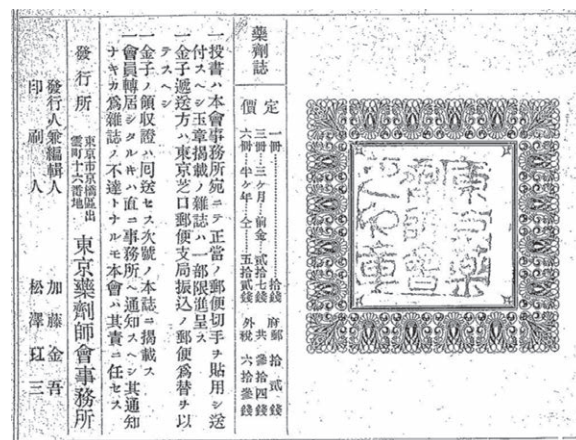


図2 『薬剤誌』第46号（明治26年3月20日）奥付

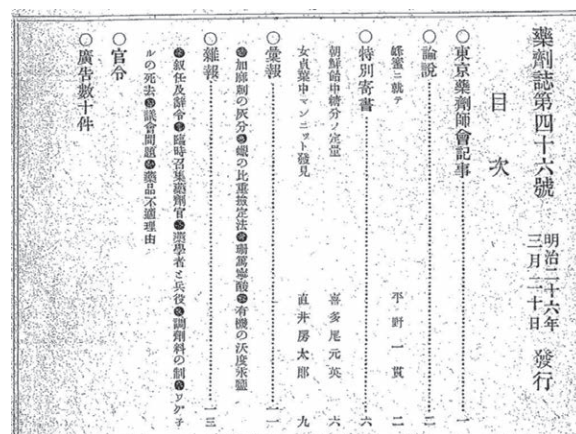


図3 『薬剤誌』第46号（明治26年3月20日付）目次

3. 「目次構成」の紹介（図3）

図3のように目次構成は以下のものであり，広告は数十件と記載され，本文は21頁からなっている。以下のように新組にし，見出しのみを掲載することとする。

「目次」

- 東京薬剤師会記事
- 論説
- 特別寄書
- 彙報
- 雑報
- 官令
- 広告数十件」

しかし，ここには「薬剤誌」，「時況」，「商況」各欄は掲載されていない。



図4 『薬剤誌』第46号（明治26年3月20日付）広告

4. 「薬剤師会記事」の紹介

ここでは「東京薬剤師会記事」を覆刻しておく
(新組・横書きとする)。

「東京薬剤師会記事」

明治二十五年十二月二十日午後六時より神田区仲町福田家に於て評議会を開き左の二件を評議せり

- 一 施薬実施法の件
- 一 新聞紙上に施薬広告を掲載する件

明治二十五年十二月二十五日午後五時より神田区神田仲町福田家に於て臨時総会を開き左の通決議せり

来る明治二十六年一月一日より実行する施薬法に就ては左の諸件を確守すべきものとす

- 一 医師施療の証明ある処方箋に限り二日以内の薬剤を与ふる事
但し連用を要する者は其都度更に処方箋の持参を求むへし
- 一 施薬したる患者の住所番地等は委しく記載を要する事
- 一 施薬品は薬品の原価に拠り隔月定会の際本会に向て其実費を請求するものとす
- 一 施薬処方箋は保存の上薬価請求の際本会へ差出すものとす

当日出席の会員は左の十五名なり

伊澤弘芳 林 忠三 林 利知 丹羽藤吉郎

堀井勘兵衛 笠井鉦太郎 小暮誠一郎 松島鐸三
小森大六 小松東助 上野金太郎 福原有信
荒井信太郎 三井良賢 志村劬七郎

明治二十五年十二月二十六日施薬広告を時事新報、毎日新聞、大日本教育新聞、東京朝日新聞二各二日間掲載す其広告文は左の如し

先年東京薬剤師会支部に於て区々に施行せる施薬の件は本会の総会に於て全会員の一致を以て更に左の如く拡張実行することに議決せり。

東京薬剤師会員にして実業に従事し会員の門標を掲ぐる者に於ては府下開業医師諸氏無診察料の証明ある処方箋を持参する者に対し薬価を要せず其処方方を調剤授与すへし

右議決の件は明治二十六年一月一日より実施す

東京薬剤師会

明治二十六年一月七日改進、自由の二新聞に前記の広告文を掲載す

5. 終刊の辞

この号には終刊の辞は書かれていない。「東京薬剤師会記事」にも終刊や休刊に関する記事は掲載されていない。1901（明治34）年に第34号⁴⁾（表1）として再刊された折には、「論説」に再刊の趣旨、再刊の祝詞が掲載されているが、第46号³⁾には休刊に関する記事は何も見当たらない。

6. 「広告」について(図4)

本文21頁の次に広告が掲載されており、頁記載のあるものが13頁、ないものが2頁ある。広告頁の上段枠外には薬剤誌第5年冊広告と印刷されている。広告内容は薬の宣伝(14件)、薬学生募集(私立薬学校、大阪共立薬学校の2件)、雑誌の宣伝(薬学雑誌、日本薬業新誌、薬業雑誌の3件)などである。

7. 第1号³⁾～第46号³⁾、および再刊の第34号⁴⁾に関する薬剤誌一覧表(表1)

第46号³⁾について考察するにあたり、第46号³⁾と、それまでに発行された『薬剤誌』の第1号³⁾から第45号³⁾までとを比較検討するために、各号の発行年月日、社説である「薬剤誌」のタイトルと該当頁、「薬剤師会記事」の主な内容と該当頁、およびその目次項目の抜粋、目次項目にある頁数、発行所、発行人兼編集人、印刷人、発行地をまとめて表1として示す。また、8年後の1901(明治34)年に再刊された第34号⁴⁾も、参考の為に表1に加え置く。この第34号⁴⁾の発行所は東京薬剤師会から、1889年に雑誌『薬剤誌』を創刊した薬剤誌社に代わった。表紙には、第1号³⁾から第46号³⁾までの薬草と薬品棚、調剤器具等の絵柄ではなく、ガマの穂などの水辺の薬草が描かれている。雑誌の名称である『薬剤誌』や発行所である薬剤誌社はいずれも縦書きで明記されており、表紙の様相は大きく変わった。目次項目に「論説」はあるが、「東京薬剤師会記事」や社説としての「薬剤誌」はない。

考 察

著者は『薬剤誌』に表れた薬剤師の専門性と専門職化形成過程に関する歴史研究を行ってきた中で、第46号³⁾の書誌的検討を含めて、第1号³⁾から第45号³⁾、および先行研究五位野論文^{1,2)}と照らし合わせて若干の考察を加えたい。

・発行日について

『薬剤誌』第46号³⁾の発行日については、目次には明治26年3月20日と印刷されている。しかし表紙には3月20日の日付の上に4月6日との訂正がなされており、3月20日に発行予定であったものが、実際の発行は4月6日に遅れたと思われる。

表1が示すように、『薬剤誌』第1号³⁾は明治22年4月15日に発行されたが、第3号³⁾から第36号³⁾までは、第26号³⁾(明治24年6月15日)を除いて、

ほぼ順調に毎月25日に発行されていた。しかし第37号³⁾は明治25年4月10日に発行され、第38号³⁾(明治25年6月13日発行)と第39号³⁾(明治25年6月24日発行)の発行日は一時的に不規則となった。先行研究によると第38号³⁾の発行所はそれまでと同じであるが、発行人兼編集人、印刷人、発行地が変わり、『薬剤誌』は刷新されたと述べている。そのために5月の発行が遅れ、6月に2回発行されたものと思われる。その後、第40号³⁾から第45号³⁾までは毎月10日に発行されていた。しかし第46号³⁾は3か月以上遅れて明治26年4月6日の発行となっている。

・奥付に見る発行所と発行人兼編集人、発行地(表1)

『薬剤誌』第46号³⁾の奥付に見る発行所、発行人兼編集人、印刷人、発行地は先の通りであるが、第38号³⁾、第41号³⁾、第45号³⁾にも同様に、発行所東京薬剤師会事務所、発行人兼編集人加藤金吾、印刷人松澤珏三、発行地東京市京橋区出雲町十六番地と表示されている。第27号³⁾～第37号³⁾の発行人兼編集人/印刷人は石井成一/岡本利三郎、発行地は東京市下谷区下谷西町三番地であったが、第38号³⁾から発行人兼編集人/印刷人は加藤金吾/松澤珏三、発行地は東京市京橋区出雲町十六番地に変更されており、その後も第46号³⁾まで同じ表記となっている。この京橋区出雲町の住所表記は『薬剤誌』創刊の発起人4人(福原有信、比留間小六、堀井勘兵衛、後藤節蔵)のうちの1人である福原有信の私宅住所と同じである²⁾ことから、第38号³⁾より東京薬剤師会の事務所は、福原の私宅に移転したものと思われる。表1に示すように、第1号³⁾から第26号³⁾までは、発行所は薬剤誌社、発行地は東京府(第6号からは東京市)京橋区南八丁堀三丁目六番地である。第26号³⁾までの薬剤誌社は『薬剤誌』創刊の発起人4人のうちの1人である堀井勘兵衛の私宅にあったため¹⁾、発行地は堀井宅の所在地を意味する。第27号³⁾から第30号³⁾までは発行所は薬剤師会となり、発行地は私立薬学校(現東京薬科大学)の当時の所在地である東京市下谷区下谷西町三番地に変更された。私立薬学校のこの住所表記は第46号³⁾の薬学生募集広告にも見られる。第31号³⁾から発行所名称が東京薬剤師会事務所と改まり、発行地は同じく東京市下谷区の表記のままで、第37号³⁾までは変更はなかったと思われる。第39号³⁾、

第40号³⁾、第42号³⁾～第44号³⁾は奥付に記載がないため確認はできないが、第38号³⁾から第46号³⁾までは同じ発行所、発行地であった可能性が高い。

・目次構成

第46号³⁾の目次構成は、先に記した通りであり、この目次構成は第39号³⁾から第46号³⁾まではほぼ同じである。つまり社説である「薬剤誌」がなくなり、「東京薬剤師会記事」が冒頭第1頁から始まっている。先行研究によると、第38号³⁾より紙面が大きく変わったとの報告がある²⁾。しかし、第38号³⁾にはそれまでの号と同じく、社説である「薬剤誌」が第1頁に存在し、第1号³⁾からずっと続いてきた従来の目次構成と同じである。つまり実状として、実際には目次構成や内容をすぐにはがらりと完全に変更しきれなかったものと思われる。

・本の頁数

目次には頁記載はないが、本文最後の第21頁に官令、続いて頁記載のある広告が13頁、頁記載のない広告が2頁あり、本の体裁としては36頁強の厚さに設えてある。広告の頁を加えてもなお、それまでに発行された第45号³⁾までと比べて、本の頁数は減っている。第46号³⁾の広告数が多いのは、本の発行に要する資金を広告で賄うべく広告集めに奔走したものと思われる。広告集めに時間を要して、予定より本の発行が遅れた可能性があり、本来は3月20日発行の予定であったものが、4月6日に延期されたものと推測される。これらのことから、先行研究²⁾が指摘するように、会員の退会や会費未納などの資金不足による経営困難が原因となり、『薬剤誌』は休刊を余儀なくされた可能性は否めない。

・薬剤師会記事について

明治25年12月20日の東京薬剤師会評議員会、続く同年12月25日の臨時総会について議決された東京薬剤師会の施薬についての内容は、創立八十年記念日本薬剤師会史⁵⁾と都薬三十年の歩み⁶⁾に、広告先と共にほぼ正確に記述されている。

議決された東京薬剤師会の施薬についての内容は、「東京薬剤師会会員で、実業につき会員の表示を掲げるものであれば、府下開業医師諸氏の無診察料の証明がある処方箋を持参する者には薬価を請求せず、無料で調剤授与すること」となっている。

江戸時代以前には医師が薬師(くすし)と呼ばれ、診断と調剤の両方を行う医業兼業をしていたが⁷⁾、

明治時代に導入されたドイツ医学を基に作成された明治7年発布の『医制』⁸⁾第41条では「医師タル者ハ自ラ薬を鬻ク(ひさぐ)コトヲ禁ス 医師ハ処方書ヲ病家ニ附与シ相当ノ診察料を受クヘシ」と謳い、医業兼業を禁じ、処方書を患者に渡し、診察料を受け取るよう述べている。にもかかわらず、その後明治22年公布の法律第十号『薬品営業並薬品取扱規則』⁹⁾(薬律)では、附則により「医師の調剤を永久に認める」こととなったことから、当時の薬剤師はこれに反発して薬剤師の専門性を主張¹⁰⁾し、「医師が調剤を兼ねないこと、調剤権は薬剤師の特権となること」を望んだ。第46号³⁾の「東京薬剤師会記事」に見られる議決内容に着目すると、明治時代の薬剤師が目ざした医業分業は、「機能的分業であって、経営的分業ではない」という赤木佳寿子¹¹⁾の指摘は的を得ていると思われる。「東京薬剤師会記事」に見られる議決内容の広告文は、「府下開業医師諸氏無診察料の証明ある処方箋を持参する者」には「薬価を要せず其処方調剤授与すへし」とある。明治時代の薬剤師が専門性を主張した「医業分業の意味するもの」は、「先ずは機能分業を目ざしていた」ことを示す1例として捉えることができる部分ではないだろうか。雑誌『薬剤誌』にみられる明治20年代当時の薬剤師の専門職意識とは、医師が「診断」し、治療技術である「薬の処方書」を作成して患者に手渡し、患者がそれを薬局に持参して、薬剤師が薬局で特権として「調剤」することと推察され、それを日本全体に医療文化として根付かせたいとの思いがあったのではないだろうか？ 議決内容の文章の中には、「施薬品は薬品の原価に抛り隔月定会の際本会に向て其実費を請求するものとす」とあり、「患者に無償で手渡した薬の原価は東京薬剤師会の隔月の例会の際にその実費を本会に請求すること」とあることから、東京薬剤師会がその薬代を肩代わりする意図があったと思われる。

薬剤師が調剤の専門家であることを知らしめるためには、東京府下開業医の証明のある処方書であれば「東京薬剤師会会員にして実業に従事し会員の門標を掲ぐる者」には、調剤した薬を患者に無料で手渡し、その原価を東京薬剤師会に請求することを提唱する。その方法を先ずは東京薬剤師会会員が率先して実行する。東京薬剤師会のこの試みがうまくいけば、次はそれを模範とした医業分業の医療文化を日

本中に広めようとしたのではないだろうか？

次いで「区々に施行せる施業の件は本会の総会に於て全会員の一致を以て更に左の如く拡張実行することに議決せり」と続き、臨時総会で決議した15名の名前が列記してある。ここで謳われた施業の件が、実際にどの程度実施されたのか、いつまで実施されたのか、については本研究では未調査である。

東京薬剤師会は、第二次帝国議会解散により薬律改正案が廃案になったこと¹²⁾、続く第三議会、第四議会でも否決されてしまった¹³⁾ ことなどにより、会員の心が東京薬剤師会から離れ、会費滞納や退会による資金不足から、会は苦しい経営を余儀なくされていたと推測される。そのような状況であるにも拘らず、何故東京薬剤師会は、東京薬剤師会会員に対して、患者に薬を無料で提供するように促し、その代金を東京薬剤師会が肩代わりしてまで支払うことを議決したのだろうか？さらに、何故その議決内容を『時事新報』をはじめとする新聞社6社に広告料を支払ってまで宣伝したのだろうか？その行為は、東京薬剤師会の薬剤師のリーダー達による、やや片意地を張った専門職意識の表れではなかろうかとさえ思える。医師の役割は患者の「病気の診断」と「処方書の作成」、薬剤師の役割は「医師の処方書に基づいて調剤する」という医薬分業の医療文化を、まずは東京に、次には日本に定着させたいという、誇り高く、強い気迫が感じられる。この時点で薬剤師のリーダー達がめざした医薬分業は、医師、薬剤師のどちらが薬代を患者から受け取るか、という実的な金銭が絡む「経営的な分業」とまでには至らず、薬の原価を東京薬剤師会が弁償してでも、先ずは専門職としての職業的な役割分担として「機能的分業」を果たすことをめざした、明治20年代の東京薬剤師会のリーダー達による医薬分業の理念の表れのひとつではないかと思われる。

1891（明治24）年12月24日の第2帝国議会に向けて薬剤師会が結集し、医薬兼業を認めた法律第十号の改正案を出そうと躍起になっていた頃の12月9日、10日の2回に渡り、福沢諭吉は『時事新報』に医薬分業に関する論文を発表し、大筋では医師と薬剤師が業務を分けることを認めながらも、経済的な問題として「医師に診療代を払い、薬剤師に薬代を払うと、患者は経済的に大変な負担を強いられることになる」との見解を発表した¹⁴⁾。福沢諭吉はそ

の後、結局はこの法律を下した政府に問題があるとしたが、大衆は福沢の経済的な見解に反応して、医薬分業に消極的になってしまったことが推察される。「医薬分業」を樹立させるには、政治的手段に訴えて立法による実現をめざすだけではなく、薬剤師こそが薬剤知識と調剤の専門職であることを先ずは積極的に世間にアピールし、大衆を巻き込んで世論を勝ち取ることの重大さを強く認識した結果、新聞各社への宣伝という手段を講じたものと考えられる。

・終刊もしくは休刊の理由

『薬剤誌』第46号³⁾には終刊の辞や休刊に関する記事は見当たらず、果たして第46号³⁾で終刊もしくは休刊をしたのであろうか、という疑念が残る。だがその後の発行は確認されていない。何故なのだろうか。これは謎のままである。1901（明治34）年に再刊された『薬剤誌』第34号⁴⁾には、「再刊の趣旨」や「再刊の祝詞」が掲載されているので、1893年発行の第46号³⁾以後、8年後に再刊の第34号⁴⁾までは休刊中であつたものと考えられる。ここでは再刊された第34号⁴⁾に関する考察を取って加えず、第46号³⁾の考察にのみ留め置きたい。

第46号³⁾の「東京薬剤師会記事」に見られる内容、および広告の掲載に多くの頁を割いていることから推して、発行継続の意気込みを感じるのは著者のみであろうか。しかし表紙の発行日訂正に見られる発行の遅れや、本文の頁の少なさと広告の多さ、前年12月の薬剤師会臨時総会への出席者人数の少なさ、さらに又、表1に示すように、前年は出席人数が充たずに隔月の例会開催が不規則になっていることなどから推測して、東京薬剤師会の財政上の理由から機関紙の発行継続が難しくなったことが考えられる。加えて、1893（明治26）年に日本薬剤師会が設立された¹⁵⁾ことで、日本全国の薬剤師会員に向けて東京薬剤師会の機関紙を発行する義務がなくなったことなどから発行が打ち切りとなったことも考えられる。このことは先行研究²⁾でも推測されている。医薬分業をめざす薬剤師のリーダー達によって創刊された『薬剤誌』の、休刊直前と思われる第46号³⁾を調査した本研究においては、発行元の東京薬剤師会は、薬剤師の専門職意識としての高邁な理念を誌上で高く掲げながらも、その理想の全てを長期間実行できる職能団体としての充実した経営基盤が伴わなかった可能性がより強く示唆された。

表 1 『薬剤誌』一覧表（第 1 号～第 46 号、および再刊された第 34 号）

	発行年	年号	頁	「薬剤誌」タイトル	「々」執筆者	頁	「東京薬剤師会記事」	出席 会員数	その他の目次項目の抜粋 (～は中略を示す)	本文 最終頁	発行人・ 編集人 / 印刷人	発行所	発行地
1 号	1889.4.15	M22	p1-4	発刊の趣旨	比留間小六	p4-6	・東京薬剤師会創設と 会員について	現会員 159 名	p6 論説 ～ p25 時況 薬品営業医薬 品取扱規則 ～ p37 官令, 広告	p46	飯田力之助 / 岡本利三郎	薬剤誌社	東京府京 橋区南八 丁堀 3 丁 目 6 番地
2 号	1889.4.25	M22	p1-4	薬剤師試験規則を 読む	記名なし	p4-8	・3 月 16 日東京薬剤師 会例会記事 ・5 月 8 日東京薬剤師会 講談会記事	47 名 41 名	p8 論説 ～ p46 官令	p46	々	々	々
3 号	1889.6.25	M22	p1-5	東京薬業組合の組 織に就て	記名なし	p5-18	・5 月 16 日東京薬剤師 会例会記事 ・5 月 22 日及 6 月 12 日 東京薬剤師会講談会 記事 ・山口県薬剤師会の景 況	45 名 35 名 49 名	p18 論説 ～ p56 官令	p56	々	々	々
4 号	1889.7.25	M22	p1-5	薬学教育の前途	比留間小六	p5-12	・6 月 17 日東京薬剤師 会例会記事 ・6 月 26 日東京薬剤師 会講談会記事	51 名 33 名	～ p46 時況 私立薬学校卒 業証書授与式 p51 商況, p54 批評	p54	々	々	々
5 号	1889.8.25	M22	p1-7	衛生上医薬分業の 必要	福原有信	p7-10	・6 月 25 日東京薬剤師 会臨時会記事	28 名	～ p14 講談 調剤の注意 ～ p40 質疑応答	p46	々	々	々
6 号	1889.9.25	M22	p1-8	東京新報寄書「人 命に関する一大問 題を読む」を読む	比留間小六	p8-12	・7 月 8 日東京薬剤師会 臨時会記事	49 名	～ p33 寄書	p38	々	々	東京市京 橋区南八 丁堀 3 丁 目 6 番地
7 号	1889.10.25	M22	p1-4	全国薬剤師会開設 の挙を賛成す	比留間小六	p4-11	・9 月 16 日東京薬剤師 会例会記事 ・同月 18 日及び 28 日同 会講談会記事	43 名 40 名 38 名	～ p39 官令, 質疑応答	p44	々	々	々
8 号	1889.11.25	M22	p1-8	川上君の駁論に答ふ	比留間小六	p8-14	・10 月 19 日東京薬剤師 会臨時会記事 ・同月 9 日及 25 日同会 講談会記事	34 名 20 名 29 名	～ p45 官令, 広告	p50	々	々	々
9 号	1889.12.25	M22	p1-8	川上君の駁論に答ふ (続)	比留間小六	p8-13	・11 月 18 日東京薬剤師 会例会記事	31 名	～ p37 質疑応答	p42	山崎行宜 / 岡本利三郎	々	々
10 号	1890.1.25	M23	p1-4	送旧迎新	比留間小六	p4-6	・明治 22 年 11 月 13 日 ・同月 27 日東京薬剤師 会講談会記事	25 名 20 名	p6 論説 薬局助手及徒弟試 験法 p42 時況 東京薬学会 第 10 回総会 ～ p53 官令, p54 質疑応答	p58	々	々	々
11 号	1890.2.25	M23	p1-7	・関西薬剤師会に記 送す ・明治二十二年法律 第十号実施延期願 の風説を聞く	丹波敬三 須田勝三郎	p7-15	・明治 23 年 1 月 26 日東 京薬剤師会例会記事 ・同年 2 月 5 日同会臨時 会記事	21 名 25 名	～ p19 薬局助手及徒弟試験 法 (前号の続) ～ p49 官令, 広告	p50	々	々	々
12 号	1890.3.25	M23	p1-3	医薬分業せざれば 国家医学全からず	丹波敬三	p3-14	・明治 23 年 2 月 16 日東 京薬剤師会第 2 次総会 記事 ・同年 3 月 3 日同会第 15 会講談会記事	51 名 23 名	～ p49 寄書	p54	々	々	々
13 号	1890.4.25	M23	p1-3	全国薬剤師懇親会 及其結果に就て	比留間小六	p3-8	・明治 23 年 3 月 20 日東 京薬剤師会臨時会記事	26 名	～ p45 官令	p45	々	々	々
14 号	1890.5.25	M23	p1-10	医薬分業の可否を 素人に質し並に飲 食物色素等の取締 規則の必要を論ず	丹波敬三	p10-15	・明治 23 年 5 月 20 日東 京薬剤師会例会記事	30 名	～ p51 官令	p52	々	々	々
15 号	1890.6.25	M23	p1-4	薬の大切な話	下山順一郎	-	東京薬剤師会記事なし	-	p4 論説 ～ p33 寄書	p40	々	々	々

休刊直前の『薬剤誌』第46号（明26.4.6）について

	発行年	年号	頁	「薬剤誌」タイトル	「々」執筆者	頁	「東京薬剤師会記事」	出席 会員数	その他の目次項目の抜粋 （～は中略を示す）	本文 最終頁	発行人・ 編集人/ 印刷人	発行所	発行地
16号	1890.7.25	M23	p1-5	薬の大切な話 （前号の続き）	下山順一郎	p5-11	・明治23年6月16日東京薬剤師会例会記事 ・同年6月30日同会講 談会記事	24名 28名	～p42 寄書	p52	々	々	々
17号	1890.8.25	M23	p1-5	富山市に於ける演説	丹波敬三	p5-8	・明治23年7月17日東京薬剤師会臨時会記事	24名	～p39 官令	p44	々	々	々
18号	1890.9.25	M23	p1-3	薬学の冤罪	山陽堂主人	p7-13	・明治23年9月19日東京薬剤師会例会記事	21名	～p47 質疑応答	p48	々	々	々
19号	1890.10.25	M23	p1-3	薬局巡視延期の風説	比留間小六	p3-4	・明治23年10月8日東京薬剤師会講談会記事	33名	～p42 長谷川泰氏の医薬分 業説を読む p44 寄贈書目	p44	々	々	々
20号	1890.11.25	M23	p1-2	タイトルなし	山陽堂主人	p2-3	・明治23年11月8日講 談会記事	15名	p3 論説 甘汞錠剤試験 p5 講談 紙類試験法（々） ～p31 寄書	p40	々	々	々
21号	1890.12.25	M23	p1-4	薬品巡視の目的及 び方法に就て	大久保町 佐治振	p4-11	・明治23年11月21日本 会例会記事	29名	～p42 官令、寄贈書目	p42	々	々	々
22号	1891.1.25	M24	p1-7	・去年の花を見今 年の実を望む ・薬学の方針	山陽堂主人 下山順一郎	p7-8	・明治23年12月16日 本会例会記事	29名	～p46 官令、寄贈書目13件、 全品目1件	p46	確認 できず	確認 できず	確認 できず
23号	1891.2.25	M24	p1-3	共同薬局設立の私案	南島逸士	p3-7	・明治24年1月16日本 会例会記事	24名	～p47 官令	p50	確認 できず	確認 できず	確認 できず
24号	1891.3.25	M24	p1-3	全国薬局長会議に 於ての演説	下山順一郎	p4-30	・明治24年2月16日本 会総会記事	49名	～p63 批評	p64	山崎行宜/ 岡本利三郎	薬剤誌社	東京市京 橋区南八 丁堀3丁 目6番地
25号	1891.4.25	M24	p1-2	第二回全国薬剤師 懇親会に就て	社末生	p3-6	・明治24年3月4日臨 時総会記事	36名	～p59 附録	p64	々	々	々
26号	1891.6.15	M24	p1-2	各地の薬剤師会に 望む	丹波敬三	p2-8	・明治24年4月2日本 会臨時総会記事	32名	～p43 官令、附録、広告	p46	々	々	々
27号	1891.6.25	M24	p1-3	黄金世界の薬剤師会	空想子	p3-4	・明治24年5月8日評 議会記事 ・同月25日講談会記事	記載なし 34名	～p47 官令 p52 寄贈書目、広告数件	p52	々	薬剤師会	東京市下谷 区下谷西町 三番地
28号	1891.7.25	M24	p1-3	薬剤師業の前途	南島処士	p3-5	・明治24年6月16日本 会記事 ・同年6月26日講談会 ・同年7月7日役員会記事	9名 30名 13名	～p40 寄書 p44 寄贈書目、広告数件	p44	々	々	々
29号	1891.8.25	M24	p1-4	薬剤師業の前途 （前号の続き）	南島処士	p4-8	・明治24年7月16日本 会記事 ・同年同月27日講談会 及び役員会記事	17名 8名	～p23 時況・全国薬剤師会 臨時総会・京都薬剤師会 総合懇親会（168人出席） p40 官令、広告数件	p40	石井成一/ 岡本利三郎	々	々
30号	1891.9.25	M24	p1-7	薬学の効用	丹波敬三	p7-9	・明治24年9月10日定 会記事	30名	～p42 東京薬剤師会々員名簿	p52	々	々	々
31号	1891.10.25	M24	p1-4	帝国薬剤師現今の 任務	村上栄太郎	p4-6	・明治24年9月10日定 会記事（前号の続き）	30名	～p33 寄書、広告数件	p40	々	東京薬 剤師会 事務所	々
32号	1891.11.25	M24	p1-2	静岡県薬剤師諸君 に告ぐ	平野一貫	p2-5	・明治24年10月9日臨 時会記事	61名	～p42 東京薬剤師会々員名簿	p48	々	々	々
33号	1891.12.25	M24	p1-2	明治24年を送る	桐蔭処士	p2-4	・明治24年11月16日 例会記事 ・島田耕一氏と須田勝 三郎氏 ・明治24年10月19日 本会臨時会記事録追加	50余名 出席人数 記載なし	～p26 医薬分業に於ける衆 議院提出案（全国薬剤師数 2,700余名） p38 寄書、寄贈書目、 広告数件	p48	々	々	々

	発行年	年号	頁	「薬剤誌」タイトル	「々」執筆者	頁	「東京薬剤師会記事」	出席 会員数	その他の目次項目の抜粋 (～は中略を示す)	本文 最終頁	発行人・ 編集人 / 印刷人	発行所	発行地
34号	1892.1.25	M25	p1-3	明治25年を迎ふ	記名なし	p4	・明治25年1月9日臨時評議会記事	出席人数記載なし	～p25時況 p30 医薬分業運動始末(請願書提出時調印者数3府35県1,324名) p58 商況, p62 官令, 寄送書目, 正誤	p62	々	東京薬剤師会事務所	東京市下谷区下谷西町三番地
35号	1892.2.25	M25	p1-2	今日の薬剤師は古本草家の事跡を鑑みよ	桐蔭学人	p3-5	・明治25年1月16日例会記事	21名	～p33 寄書 p42 官令, 寄贈書目	p43	々	々	々
36号	1892.3.25	M25	p1-4	薬剤師の責任並方針	丹波敬三	p4-14	・医薬分業請願に関する本会の方針 ・明治25年2月16日東京薬剤師会第4回総会記事	40名	p14 論説 p44 雑録 p46 時況 ～p60 寄送書目	p60	々	々	々
37号	1892.4.10	M25	p1-3	茨城県下薬業者諸氏に望む	平野一貫	p3-6	・明治25年3月11日東京薬剤師会臨時総会記事	31名	～p34 寄書 p40 寄贈書目, 広告数件	p40	々	々	々
38号	1892.6.13	M25	p1-3	薬剤師の業務に就て	峯南生	p3-4	・明治25年4月21日東京薬剤師会評議会記事 ・同月28日東京薬剤師会臨時総会 会員異動	出席人数記載なし	～p24 雑報, p38 官令, 寄贈書目, 広告数件	p39	加藤金吾 / 松澤亘三	東京薬剤師会事務所	東京市京橋区出雲町16番地
39号	1892.6.24	M25	p1-7	項目「論説」有 「薬剤誌」無	無	p1	・明治25年6月3日東京薬剤師会評議会記事	12名	p8 特別寄書 p13 彙報 p19 雑録 p24 雑報, p48 官令, 寄贈書目, 会費領収証, 広告数件	p49	記載なし	記載なし	記載なし
40号	1892.7.10	M25	p1-10	項目「論説」有 「薬剤誌」無	無	-	東京薬剤師会記事なし	-	p11 特別寄書 p14 彙報 p18 雑報 p40 官令 p42 公文, 会費領収証, 広告数件, 附録	p42	記載なし	記載なし	記載なし
41号	1892.8.10	M25	p1-15	項目「論説」有 「薬剤誌」無	無	p1	・明治25年7月6日評議会記事 ・臨時談話会記事	5名 12名	p16 特別寄書 p17 彙報 p21 雑録 p26 雑報 p53 官令, p56 公文, 正誤, 寄贈書目, 会費領収証	p57	加藤金吾 / 松澤亘三	東京薬剤師会事務所	東京市京橋区出雲町16番地
42号	1892.9.10	M25	p1-16	項目「論説」有 「薬剤誌」無	無	p1	・会員異動について	-	p16 特別寄書 p20 彙報 p22 雑録 p29 雑報 p49 官令, 正誤, 会費領収証	p50	奥付に 記載なし	記載なし	記載なし
43号	1892.10.10	M25	p2-3	項目「論説」有 「薬剤誌」無	無	p1	・明治25年9月16日評議会記事 ・同日例会記事	8名 24名	p3 特別寄書 p9 彙報 p21 雑録 p29 雑報 ～官令, 会費領収証	p55	奥付に 記載なし	記載なし	記載なし
44号	1892.11.10	M25	p3-9	項目「論説」有 「薬剤誌」無	無	p1-3	・明治25年10月15日評議会記事 ・同月21日臨時総会記事 檄文について	9名 28名	p10 特別寄書 p13 彙報 p19 雑録 p22 雑報 p42 官令 p43 寄贈書目, p44 会費領収証, 正誤	p45	奥付に 記載なし	記載なし	記載なし
45号	1892.12.10	M25	p1-13	項目「論説」有 「薬剤誌」無	無	p1	・会員異動について	-	p14 特別寄書 p31 彙報 p36 雑報 p46 会費領収証, 広告数十件	p47	加藤金吾 / 松澤亘三	東京薬剤師会事務所	東京市京橋区出雲町16番地
46号	1893.4.6	M26	p2-5	項目「論説」有 「薬剤誌」無	無	p1-2	・明治25年12月20日評議会記事 ・同月25日臨時総会記事	出席人数記載なし 15名	p5 特別寄書 p11 彙報 p13 雑報 p21 官令 広告数十件	p21	々	々	々
休刊													
34号*	1901.5.25	M34	p1-6	「論説」** ・薬剤誌再刊の趣旨 ・薬剤誌再刊の祝詞	記名なし 丹波敬三 他		東京薬剤師会記事なし	-	p7 実験記事 p10 学事彙報 ～p48 官令 p50 雑録 p57 雑報	p62	山田敏信 / 渡邊為蔵	薬剤誌社	(支局) 東京市越町6丁目14番地

*34号として再刊 **目次の「論説」は本文中では「薬剤誌」と変更してある

おわりに

かつて教育学博士，寺崎昌男先生（東京大学，立教大学，桜美林大学各名誉教授，大学・高等教育史専攻）は「近代教育史研究への最大の贈り物 教育関係雑誌目次集成」という一文を掲載し次のように述べた（『本のニュース』¹⁶⁾ vol. 9, 1997年10月25日，2～3頁から引用）。

「より広く教育史研究を進めるには，広義の教育ジャーナリズムの検索と検討，そのための所在の確認，記事索引などが必要である。全国誌，地方誌の区別なく，また団体の思想的立場とのかかわりなく，しっかりとしたインデックスも不可欠だ。」

「“教育関係目次集成”の編集作業に当たった中の一人，樽松かほる先生の父上が樽松先生に『あなたのやっている仕事は自分のための仕事でなく，人が便利になるための仕事なのだね』と念を押されたという。『そうです』と答えると，父上は『それならしっかりやらなくちゃいけないね』と励まされたという話を自分は感動をもって聞いた。自分の研究は後回しにしてでもやりとげなければならなかった検索・収集作業，それが貫かれた価値は大きい。」と述べている。

歴史研究にとって資料は命であり，この小さな発見が新たな創造に満ちた歴史のいのちを輝かせてくれることを願って止まない。

謝辞 調査研究にご助言を下さいました高崎商科大学 菅原亮芳教授，文献調査にご協力頂きました昭和大学図書館 茨木朝子氏に深く感謝申し上げます。

利益相反

本研究は「平成28～31年度科学研究費補助金基盤研究（B）「近代日本準専門職形成史の研究：キャリアコース・試験情報・専門性向上言説を中心に 研究代表者菅原亮芳」（課題番号16H03767）の一環として実施したものです。

文 献

- 1) 五位野政彦，「薬剤誌」の目次リストとその記事内容，背景（1）東京薬剤師会発足時 第1号（1889（明治22）年4月）から第25号（1891（明治24）年4月）まで，薬史誌，2016;51:86-95.
- 2) 五位野政彦，「薬剤誌」の目次リストとその記事内容，背景（2）東京薬剤師会組織変更以降第26号（1891（明治24）年6月）から第45号（1892（明治25）年12月），薬史誌，2017;52:30-40.
- 3) 薬剤誌，1889-1893;1-46.
- 4) 薬剤誌，1901;34:1-62.
- 5) 谷岡忠二編，明治25年（1892）東京薬剤師会役員更迭，創立八十年記念日本薬剤師会史，東京：日本薬剤師会；1973，pp46-47.
- 6) 東京都薬剤師会，明治25年（1892年）二 その他の事項，都薬三十年の歩み，東京：東京都薬剤師会；1978，pp46-47.
- 7) 中西 啓，南蛮医学から蘭方医学へ はじめに近世以前の日本の医学，新版ニッポン医家列伝 日本近代医学のあけぼの，福岡：P&C；1992，pp8-13.
- 8) 厚生省医務局編，醫制，医制百年史 資料編，東京：ぎょうせい；1976，pp36-45.
- 9) 谷岡忠二編，薬事制度の基本体系成る 薬品営業並薬品取扱規則公布，創立八十年記念日本薬剤師会史，東京：日本薬剤師会；1973，pp19-22.
- 10) 秋葉保次，中村 健，西川 隆，ほか編，薬律制定（明治22年3月15日）と薬剤師連合会結成（同23年4月6日），医薬分業の歴史 証言で綴る日本の医薬分業史，東京：薬事日報社；2012，pp9-13.
- 11) 赤木佳寿子，戦後日本における薬剤師職能の変容：医薬分業の発達史の観点から（博士学位論文），一橋大学大学院社会学研究科，一橋大学機関リポジトリ HERMES-IR，2016.（2018年3月28日アクセス）<https://irdb.nii.ac.jp/01368/0000406157>
- 12) 谷岡忠二編，明治24年 最初の議会運動，創立八十年記念日本薬剤師会史，東京：日本薬剤師会；1973，pp44-46.
- 13) 谷岡忠二編，明治25年 第三，第四帝国議会への請願，創立八十年記念日本薬剤師会史，東京：日本薬剤師会；1973，pp48-49.
- 14) 天野 宏，川淵美奈子，田中淑子，ほか，福沢諭吉と医薬分業，薬史誌，1993;28:57-62.
- 15) 谷岡忠二編，明治26年 日本薬剤師会設立，創立八十年記念日本薬剤師会史，東京：日本薬剤師会；1973，pp51-53.
- 16) 寺崎昌男，近現代教育史研究への最大の贈り物，本のニュース，1997;9:2-3.

THE INDEX AND THE CONTENTS OF THE JOURNAL “YAKUZAISHI” NO. 46
PUBLISHED ON APRIL 6, 1893, AS A CLUE INVESTIGATING THE PROCESS OF
PROFESSIONAL FORMATION OF PHARMACISTS IN THE MEIJI PERIOD

Emiko OGUCHI

Showa University, Kamijo Memorial Museum

Abstract — In my research concerning the pharmacists’ professionalization process in the Meiji period, I obtained “YAKUZAISHI” published in 1893 which had been thought not to exist. The aim of this report is to introduce this journal contribution to prior research or other historical research. The cover, index and the back cover of “YAKUZAISHI” No. 46 published in 1893, were almost the same as No. 45 published in 1892. The number of pages in the main body of this book was 21 pages, much less than those of No. 1 to No. 45, and nevertheless, there were many pages of advertising in it. Although there is no article on the final publication in “YAKUZAISHI” No. 46, by guessing from the delay of the publication, the small number of body pages, the large number of advertising pages and the small number of participants attending the Tokyo Pharmaceutical Association in December 1892, it is thought that the continued publication of “YAKUZAISHI” by the Tokyo Pharmaceutical Association was canceled due to financial problems. This possibility was also suggested in a previous study concerning “YAKUZAISHI” from 1889 to 1892, but the investigation of “YAKUZAISHI” No. 46 published in 1893 made its possibility more reliable.

Key words: “YAKUZAISHI”, Meiji period, formation process of pharmacists’ profession, separation-of-clinic-and-dispensing, dispensing privileges

〔特別掲載（査読修正後受理）〕